說林

南漢劉氏の祖先につきて

藤田豐八

一昨年の事と覺ゆ、予は泉州西域人蒲壽庚の「アラビア」人なるべきを想ひ、その大要を「ユール氏注マルコポーロ補正二則」と題する文末に附識したり。固より隨筆的の記述にして殆ど人の顧るところとならざりき。その後この事に關する材料を蒐集し、やゝ得るところありしが、昨年の史學大會に於て桑原博士のこの問題につきて詳細なる研究を發表せらるゝあり、殆ど予が言はんと欲するところ、否な言ひ能はざるところに言及せられ、蒙を啓きしもの多かりき。その後博士は特に書を予に寄せられこの問題に關し予が一昨年公にせしものに心付かざりしを陳謝せられしも、こは予の記述のあまりに簡略にして且つ他文に附識せし等の事情より起り、その罪全く予に在り。予は却て博士の雄篇を得てこの問題の略ぼ解決せられしを喜ぶものなり。實際博士の論文は微を鑿ち細に入り、略ぼ餘蘊なきものなるが、こゝに序を以て一二の蛇足を加ふれば、この蒲氏兄弟がその祖先より久しく支那に留りし結果として、頗る支那の文學にも通じたるが如き是なり。宋の遺老なる周密が志雅堂雜錄卷上に依れば邵武の人廖瑩中群玉號藥洲が賈次道の客となり舊帖遺墨を鐫刻し、精妙眞に逼るを說き次にいふ。

先是賈師憲、用婺州碑工王用和、鐫刻定武蘭亭、

凡三年而後成、至酬之以男爵、絲髮無遺恨、幾與定武相亂、又縮爲小字、刻之靈壁石板、於是群玉蘭亭遂冠諸帖、世綵堂蓋其家堂名也、其石後爲泉州蒲壽庚航海、載歸閩中、途中被風墜江中、或尙在、特不全耳

と、されば壽庚も亦た當時の士大夫の風を趁ひ、碑帖の類を愛玩せしに似たり。特にその兄壽宬の如き、今尙ほ詩集の存するものあり、卽ち四庫全書總目及び永樂大典採輯書の目錄にその著せる心泉學詩稿六卷あり。この書未だ見ざればその如何なるものなるや知るに由なきも、總目卷一百六十五の提要にいふ。

宋蒲壽宬撰、壽宬之名、不見於史、其集亦不載於藝文志、惟明文淵閣書目、載有蒲心泉詩一部一册、檢永樂大典、各韻內所錄頗多、題名皆作壽宬而淩迪知萬姓統譜、則作壽出宬、黃仲昭八閩通志又作壽晟、互有異同、今案永樂大典卷卷

皆作宬字、當非偶誤、其作晟宬字者、殆傳寫譌也、壽宬家本泉州、其官履不概見、惟萬姓統譜稱、其於咸淳七年知蒲州、案蒲州非南宋地、而集中有梅陽壬申勸農偶成書呈同官詩、壬申爲咸淳八年、梅陽卽梅州、今爲廣東嘉應州地、是壽宬實知梅州、萬姓統譜又載其在官儉約、於民一毫無所取、建曾井、汲水二硏置座右、人頌曰、曾氏井泉千古洌、蒲侯心事一般淸、是壽宬在當日爲循吏、八閩通志則稱、宋季益廣二王航海至泉州、守臣蒲壽庚距城不納、皆出其兄壽宬陰謀、壽宬佯著黃冠野服、入法石山下、自稱處士、而密令壽庚納欵於元、旣而壽庚以歸附功、授官平章、富貴冠一時、壽宬亦居甲第、一日二書生踵門獻詩、有水聲禽話皆時事、莫道山翁總不知之句、壽宬惶汗失措、追之不復見云云、則壽宬又一狡黠之叛人、稗官小說記載多岐、宋元二史皆無明文、其孰僞孰眞、無從考證、今觀其詩、頗有沖澹閒遠之

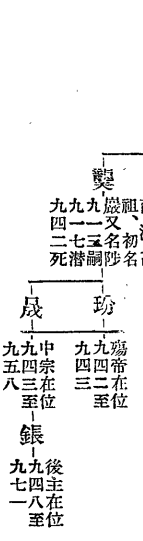
致、在宋元之際、猶屬雅音、裒錄存之、釐爲六卷、亦足以備一家、若其人則疑以傳疑、姑附諸南宋之末焉

と。さればその名も壽宬を以て正とすべく、心泉は號なるべく、その詩も亦た凡ならざるが如く、蒲氏兄弟の「アラビア」人なるにも拘らず、頗るその支那人化したるを見るべし。想ふに泉廣に留れる「アラビア」人は宋時に至りて支那の文學を修むるもの頗る多きに至りしものゝ如く、宋蔡絛の鐵圍山叢談卷二に

大觀政和之間、天下大治、四夷響風、廣州泉南請建番學、高麗亦遣士、就上庠、及其課養有成、於是天子召而廷試焉云云

と見ゆ、廣州泉州に居る番人には「ペルシャ」人「アラビア」人多く、所謂番學は此等番人に支那の文學を授くる學校にして、而して此等學校が已に北宋の時に於て建てられしとせば、南宋に入りて所謂番人主として「アラビア」人の支那文學に通ぜるもの少なからざりしを察すべく、蒲氏兄弟の如き亦たその類なりしなるべし。若しそれ壽宬の人品に至りては、壽庚に較じて更に隱險なりしものゝ如く、在官儉約循吏に似たると、自ら山林に隱れその弟をして故主に叛かしめ名を傷けずして家を守らんとせしとは、性格に於て兩立せざるものにあらざるが如し。

さて廣東が海外貿易の中心として泉州よりも早く開かれ、唐時に於て「ペルシャ」人若くば「アラビヤ」人のその地に居留するもの多數にして且つ有力なりし關係よりして、已に唐末に於て支那歷史にその名を留め、子孫に至りて、所謂五代の時に於て、嶺南六十州に君臨せしめし一人あり、卽ち南漢の祖劉謙是なり。今說明の便宜の爲めその世系の略を揭ぐれば左の如し。



南漢興起の基礎を置きしものは劉謙なり、字を德光といふ。唐書本傳には劉知謙に作り、同韋丹傳には劉謙に作る。たゞ十國春秋に劉謙望字德光、亦名知謙、後止名謙と見ゆれば、知謙とも謙とも、また謙望とも稱せしが如し。唐懿宗の咸通中、宰相韋宙の出でゝ南海を鎮するや、謙時に牙校たり（唐時本傳牙將に作り、孫光憲北夢瑣言小將に作る、卑級の武官なり）。僖宗の乾符五年（八七八）黃巢の嶺表に寇し、次年その北還する、謙之を擊ちて屢、功あり。この黃巢こそ「アラブ」人「アブ、サイド」のBansolouaとして傳へ、當時廣府在住の「モスルマン」

「ジュー」「クリスチアン」「マグ」等の、爲めに死せしもの十二萬人に及べりといへるものなれ（「マスージ」に依れば二十萬とあり。）中和三年（八八三）封州刺史兼賀水鎮使を授けられ、昭宗の乾寧元年（八九四）に卒せりといふ、歐陽修五代史南漢世家、司馬光資治通鑑、馬端臨文獻通考、王象之輿地紀勝等に據れば、その父を安仁といひ、薛居正五代史、冊府元龜、宋史等は並に仁安に作れり。南漢の世系は孰の書に據るも、この以上に遡る能はず。しかも、王禹偁東都事略劉鋹傳、宋史南漢世家にはその先を蔡州上蔡の人なりといひ、唐書劉知謙傳には壽州上蔡の人なりといふも、南漢書の著者梁延枏、南漢紀の著者吳蘭修の云へるが如く、唐時上蔡は蔡州に屬し、河南道に隸し、下蔡は壽州に屬し、淮南道に屬したれば、壽州の上蔡とはいふべからず。上蔡は今も縣名として存し、河南汝陽道に屬せり。又た薛居正五代史、冊府元龜には並に之を彭城の人なりとい

ふ。吳越備史梁末帝制詞に彭城巖とあり。彭城は古の大彭氏の地と稱せられ、今の江蘇銅山縣治なり。梁太祖開平元年、そが皇帝を稱するや、劉謙の子劉隱に檢校太尉兼侍中を加へ、大彭郡王に封ず、胡三省通鑑に注していふ、

自宋武帝、以彭城之裔興於江南、後多以彭城之劉爲名族、隱封大彭王、意蓋取此

と。蓋しその姓の劉にして、南方に興る、故にその先を彭城の人と稱せしなるべく、特に劉鋹に至りては自ら漢の子孫を以て居り、家もと咸秦、蠻夷に王たるを恥づと言ひ、唐天子を呼びて洛州刺史となすと傳ふるが如き、殆ど唐の姓の李なるよりして、老子を以てその祖とするの類にあらざるなきやを疑ふ。要するに上蔡若くは彭城に居れりと傳ふる劉安仁以前の世系の全く不明なる極めて怪むべきに似たり。

而して劉氏南遷に關しても諸史傳ふる所同じからず。薛居正五代史、冊府元龜に據れば、仁安に至り、唐に仕へて潮州長史となり、因りて嶺表に家せりといひ、東部事略、降平集、宋史並に長史を刺史に作れり。こは孰れか誤なるべきも、歐陽修五代史、馬端臨文獻通考に據れば、安仁は上蔡より閩中に移り、南海に商賈し、因りて家せりといひ、又た五國故事には上蔡より閩の仙遊に移り、因りて家せりといひ、王象之の輿地紀勝には泉州條下に淸源志を引きて「劉王墓は南安縣の地劉店馬鋪と名づくる處の西に在り、廣州僞漢龔の祖此に葬る」といへり。南安は泉州附近の縣名にして仙遊また泉州府治を距る遠からず、共に沿海の地なり。されば安仁若くば仁安は官に潮州に就きて廣東に家せりといひ、福建泉州若くばその附近に遷り、商賈して廣東に移れりとの二說あるなり。しかもその子劉謙が初め微にして後に顯れ、その子孫の帝號を僭僞せし等の事情より考へ、後說或は眞を得たるに庶幾からんか。之を要するに劉氏の先が上蔡若くば彭城に居りしといふは

疑ふべく、これたゞ劉なる姓より附會せしに似、劉謙の父安仁が福建に居りて商賈を業とし後ち廣東に移りたりと傳ふる或は事實なるべし。由來帝王の祖先に關する所傳には揑造多く、後世史家概ね之を追述するに過ぎざれば、予が南漢劉氏の祖先につきて上に述ぶるが如き疑を挿めばとて、さまでの不當とは稱すべからず。而して予は仁安の居れりと傳へらるる福建廣東の兩地が、古代に於て海外貿易の要口たるに於て頗る注意するに足るべきものあるを覺ゆ。

以上說くところは南漢劉氏の祖先につきて諸史傳ふる所に挿める予の疑のみ、たゞかゝる疑を挿めばとて不當ならずといふのみ。しかもこゝに最も異とすべき一事あり。そは五代孫光憲北夢瑣言に載するところ是なり。卽ち左の如し。

亟相韋公宙出鎭南海、有小將劉謙者、職級甚卑、氣守殊異、乃以從猶女妻之、其內以非我族類、慮招物議、諷諸幕寮、請諫止之、亟相曰、此人非常流也、他日吾子孫或可依之、謙以軍功拜封州刺史、韋夫人生子、曰隱曰巖、隱爲廣帥、巖嗣之、奄有嶺表四府之地、自建號曰漢、改名龔、在位經二紀而終、次子嗣、卽京兆知人之鑒非謬也

五代の人にして、五代の事を傳ふ、大體に於て信を置くべし。たゞ巖卽ち龔は段氏の出、韋氏の生むところにあらず。しかもその生後三日にして韋氏妬して段氏を殺し、養ひて己の子となせしといへば、當時韋氏の生むところと傳へしは却てこの書の信ずべきを證するもの、この一事を以て他を輕重するに足らず。而して韋宙がその從猶女を劉謙に嫁せんとするに當り、その妻が謙の我が族類に非らざるを以て、物議を招かんを慮り、諸幕寮を諷して之を諫止せんと請ひたる、その漢人に非らざるを證するものなり。なほ薛居正五代史には

唐咸通中、宰相韋宙出鎭南海、謙時爲牙校、職

甚卑、然氣貌殊常、宙以猶女妻之、妻以非其類堅止之、宙曰、此人非常流也、他日我子孫或可依之、云云

と見え、略ぼ同一の事實を傳へ、唐書劉知謙傳には

韋宙以兄女妻之、衆謂不可、宙曰、若人狀貌非常、吾以子孫託之

といひ、頗る省略せられて原意を失へりと雖も、なほ痕跡の存するを見る。若し夫れ南漢劉氏が果して漢の劉氏に出で、その祖安仁若くば仁安が潮州長史若刺史なりとせば、何が故に韋宙の妻をして我が族類に非ずと稱せしめたる。その純然たる支那人にあらざる疑なきに似たり。

次に南漢劉家諸人の狀貌の史乘に徵すべきものを見るに、劉謙につきて北夢瑣言は氣宇殊異と稱し、薛居正の五代史には氣貌殊常と稱し、唐書には狀貌非常と稱し、頗る常人に異なりたるものありしを示す。しかもこは偉人傑士に往往見るところにして何等異とするに足らずとするも、史は更に劉鋹の狀貌を傳へ

後主體質豐碩、眉目俱竦

といひ、伍崇曜が吳蘭修所著南漢金石志跋に恭巖札記を引きて

元妙觀西院功德林、有僞南漢主劉鋹及二子銅鑄像、狀豪惡可憎、俗稱番鬼

といへる、やゝ西人に近き狀貌を有せしに似たり。なほ南海百詠に「昔鋹及二子、各範銅爲像、少不肖卽殺冶工、凡再三乃成、今尙在天慶觀中東廡」といへば、その頗る劉鋹に似たるを必すべし。また宋史歐陽修五代史等に劉鋹が宮婢波斯女等と淫戲し、復た出でゝ事を省せざるを載せ、陶穀の淸異錄の如き

劉鋹昏縱、角出衙、波斯女年破瓜、黑皙而慧艷、善淫曲盡其妙、鋹嬖之、賜號媚豬

といへるは、南漢劉氏が「ペルシャ」人若くは「アラブ」人にあらずやとの疑をして益〻深からしむるものにあらずや。

之を要するに南漢劉氏は殆ど支那人にあらず、然らば劉の姓は何より之を得たるか、時はやゝ下るも、南宋朱彧の萍洲可談卷二にいふ。

元祐間、廣州蕃坊劉姓人、娶宗女、官至左班殿直、劉死、宗女無子、其家爭分財產、遣人撾登聞鼓院、朝廷方悟宗女嫁夷部、因禁止三代須一代有官、乃得取宗女

と。蕃坊は猶ほ今の外人居留地の如し。廣州蕃坊に關しては、上に引ける萍州可談にも見え、當時「アラブ」人の居留せるもの多く、略ぼその居留地と視て不可なきが如し。可談に廣州蕃坊海外諸國人聚居といへるも、その蕃人の猪肉卽ち豚肉を食はず自ら六畜を手刀するにあらざれば食はざるを說ける回教徒なるを證するものなり。而して元祐間そのうちに劉姓の人ありといふ。卽ち宋時に於て廣州蕃坊に劉姓の「アラブ」人ありしなり。而して皇室と同宗の女を娶り、官も左班殿直に至りしといへば、久しく支那に居り、支那化したる「アラブ」人にして、在支「アラブ」人の有力者なりしなるべし。岳珂はその程史に於て番禺卽ち廣東の「アラブ」人、所謂海獠を傳へ、その最豪なるものを蒲姓なりといふ。蒲は「アラブ」人の名に習見せるAbou の音譯なること、「ヒルト」氏のいへるが如く、略ぼ疑ひなかるべく、予は劉もまた殆ど「アラブ」名の音譯なるべしと信ずるものなり。卽ちAla, Ali などの對音なるや知るべからざるも、想ふにelの音譯ならん。この國人はその名の末に所生の地名を加へ、その地名の前に音に因りてel, es 等を加へ、地名とそれのみを以て、別名とし若くば通稱とす。例せばel-Istahakhri, es-Sirafi など稱するが如し。しかもelを冠するもの最も多し。予は固より「アラブ」語を知らず。され

ばこの解釋の當れりや否やは保證する能はず。しかも南漢の劉氏が、上に述べたる北夢瑣言五代史等の所傳及びこの一族の容貌等より推して、殆ど萍州可談に見ゆる廣州蕃坊の劉姓の夷と均しく「アラブ」人なりと信ずるものなり。因に後世の支那回徒に劉姓の人多き、亦た注意するに足る。

劉謙の父安仁の上蔡若くば彭城の人なりしや否やは明ならず。しかもその一たび福建に居り、尋で廣東に移りしはやゝ信ずべきに似たり。唐時に於て市舶使の設けられしは廣州のみなるが如く、唐書紀傳市舶に關する記事は概ね廣州の一府に止まり「アラブ」人の當時の支那を傳ふるまた福建の海口を擧ぐるものなし。しかもこの地に海外交易の行はれたる由來極めて古く、後漢書鄭弘傳にいふ。

建初八年、代鄭衆爲大司農、舊交阯七郡、貢獻轉運、皆從東冶、汎海而至、風波艱阻、沉溺相係、弘奏開零陵桂陽嶠道、於是夷通、至今遂爲常路

と、章懷は東冶に注していふ。

東冶縣屬會稽郡、太康地理志云、漢武帝名爲東冶、後改爲東候官、今泉州閩縣也

と、唐景雲二年泉州を改めて閩州となし、武榮州を泉州となし、閩州都督府に屬す。こゝに所謂泉州は今の福州をいひ、閩縣は今福建省治の在るところ、今の閩候縣是なり。されば建初八年（八三）嶠道卽ち嶺道の通ずるに至るまでは、交阯七郡の貢獻物貨は海上今の福州に入り、之より轉運せられしなり。されば海口として此地の繁盛は想像し得べく、嶺道の通ずればとて、全く衰滅すべきにあらず。又た後漢書及び三國志吳志に夷洲澶洲の說を傳へ

其上人民時至會稽貨市、會稽東冶縣人海行、亦有遭風流移至澶洲者云云

といへば、今の福州の直接に海外に通商せる地たりしを知る。而して西南諸國扶南林邑等の貢物の交州を經しは、吳志呂岱傳に依りて明に、舊唐書地理

志安南都督府條下に所謂「其海南諸國、大抵在交州南及西南、居大海中洲上、相去或三五百里、遠者二三萬里、乘船舉帆、道里不可詳知自漢、武已來、皆朝貢必由交趾之道」もの、少なくともその一部は此地を過ぎしなるべし。又た唐時此地に外船の出入せしは入唐五家傳、圓珍撰行歷抄、唐房行履錄等に依りても明白疑ふべからずして、僅かに桑原博士の引用せる唐文宗太和八年（八三四）の上諭に、南海蕃船の苛稅に苦しむを說き、その宜しく體恤すべきを論じたる中に其嶺南福建及揚州蕃客云云と見ゆるのみにあらず。又た唐末王審知の福州に據る、歐陽修五代史はいふ。

招來海中蕃夷商賈、海上黃崎、波濤爲阻、一夕風雨、雷電震擊、開以爲港、閩人以爲審知德政所致、號爲甘棠港

と、北夢瑣言は電擊開港の事を唐照宗乾寧中（八九四—八九七）のことなりとし、淳熙三山志（彭元瑞五代史記注引くところ）は之を天祐元年（九〇四）の事とす。その孰か是なるを知らずと雖も、しかも天祐三年照宗敕建の德政碑にこの事を載せたれば、その以前に在るや疑なし。而して德政碑にはなほその蠻夷招來を說き、宛土龍媒寧獨稱於往史、條支雀卵諒可繼於前聞などいへり。されば福州は當時に於てもなほ海外貿易の要口たりしなり。又た五國故事泉州王邽の子延彬の事を紀していふ

邽初領兵至泉州、舍于佛寺、始生延彬于寺之堂、既生而有白鶴一、栖于堂中、迄延彬之終、方失其所、凡三十年、仍歲豐年、每發蠻船、無失墜者、人因謂之招寶侍郎、

と。されば泉州も亦海外に通商せしなり。之を要する市舶司の泉州に置かれしは宋に入りて後の事なるも、福州若くば泉州に於て海外貿易の行はれしは漢より五代に至るまで、略ぼ史實の徵すべきものあり。されば南漢の祖仁安が唐時福建に居りし「アラ

ブ」なりしとするも何等不可とすべき理由なきなり。而してそが福建より廣東に商賈し因りて家せりと傳ふる、却てそが「アラブ」人たるの消息を傳ふるものとも見得べし。若し夫れ廣東が唐時支那最盛の海外貿易口として「アラブ」人の居留するもの多く、且つ頗る力ありしは東西の史料の徵すべきもの多く、こゝに案說を要せず。その間に於て劉謙の如きものゝ出づる決して偶然にあらず。

以上說くところ寔に蕪雜を極む、なほ予は蒲壽庚兄弟の事に關して桑原博士の雄篇を得たるが如く、この問題に關しても更に大作の現れんことを望むや切なり。予やたゞ隗たるを得ば足ならんのみ。

（大正五年二月二十八日本調査部講演）

林邑樂に就いて

津田左右吉

奈良朝から平安朝の初にかけて我が國に行はれた種々の樂のうちに林邑樂といふものがある。其の名の國史に見えるのは續日本紀（卷二四）天平寶字四年の條に「作唐、吐羅、林邑、東國、隼人等樂」とあるのが初であるが、東大寺要錄によると、天平勝寶四年の大佛開眼供養の折に唐古樂、唐中樂、唐散樂、高麗樂など、共に林邑樂が奏せられたらしいから、遲くとも此の頃からは既に我が國に行はれてゐたのであらう。もつとも雅樂寮に林邑樂の置かれたのは平安朝に入つてからのことで、大同四年に雅樂寮樂師の定員を改正した時の太政官符に「林邑樂師二人。今置」と見えてゐる。しかし、本來林邑樂は宮廷よりは寺院の方に多く用ゐられたもので、樂人も寺院に於いて養はれてゐたらしく、國史の記事を檢べてみても「幸山階寺、奏林邑及吳樂」（續紀卷二八、神護景雲元年）とあるやうに寺院樂たる吳樂（伎樂）と同樣に取り扱はれてゐたから、大同時代になつて雅樂寮にも樂師を置きはしたものゝ、やはり寺院の方が盛であつた